

0～2歳における自己認知の発達

——乳児・他者関係からの考察——

一 谷 聖 子*

INFANT-OTHER INTERACTION AND DEVELOPMENT OF SELF-RECOGNITION
IN THE FIRST TWO YEARS OF LIFE

Seiko ICHITANI

This study examined the developmental process of self-recognition through the infant-other interaction. Detailed diary records about the author's son R and his reactions to strangers, peers and mirror images in the experimental situations were analyzed from his birth to 25 months of age. After 4.5 months, when R was watching his parents, he sometimes looked away, avoiding an eye contact. This seemed to be the budding awareness of others as different from himself. At 9-10 months, he became aware of the fact that he himself had a location in space, showing self-assertion and a beginning to understand others' intentions. From then on, he imitated others' acts and experienced that his intentions were thwarted by others; and then at about 17 months, he began to behave with an awareness of his own intention. This seemed to be the emergence of self as an active agent. It was not until at 24 months, however, that he demonstrated mirror self-recognition, and it was when he began to understand another's point of view.

Key words : self-recognition, infant-other interaction, mirror self-recognition, another's point of view, infant.

問 題

自己の発生,あるいは自我の形成という問題については, Mead (1934) や Wallon (1946, 1956) による考察があるものの, 実証的研究はほとんどなされていなかった。近年になって Gallup (1970) が, 鏡映像を他者でなく自己だと認識しているかどうかを調べるための実験方法を考察し, チンパンジーにおける自己鏡像認知に関する一連の実験を行った。そこでは, 自己認知の指標として, 鏡を見て自分の鼻につけられている紅にさわるという行動が用いられた。

Gallup の手法を用いた実験的観察は, 言語理解や表

現が困難な乳幼児に対しても行われた (Amsterdam, 1972 ; Bertenthal & Fisher, 1978 ; Lewis & Brooks-Gunn, 1979 ; 百合本, 1981 など)。これらの研究結果をまとめると, 乳児が自己の身体を自分のものとして認知していく過程には, 次のような段階を設定できる。

第1段階は, 鏡像に対する凝視, 接触, 微笑, 発声などが多くみられる時期で, 自分の鏡像と他者に対する反応がまだ分化していないといえる。第2段階は鏡の性質の理解がみられる時期で, 鏡の前で体を動かしたり, 自分の体の動きに連動していれば, 実際の物の位置が見つけられる。この時期は8か月から12か月で, 自分自身の体と動く視覚像の間の原因—結果の関係を理解していると言える。第3段階は1歳から1歳半頃で, 鏡を空間上の物の位置を見つけるのに使えるようになる。たとえば, 鏡像を見て背後のおもちゃをふり

* 所属機関なし

返ることができるようになる。この時期には、まず他人の鏡像を見て「～さんどこ？」の問いに他人の実物を指さしたり、実物の方にふり向くことができるようになり、ついで、「～ちゃんどこ？」の問いに鏡の自己像または自分自身を指さすことができるようになる。第4段階は、鏡像を見て紅をつけられた自分の鼻をさわることができるようになる段階で、1歳半頃から2歳くらいにかけてである。すなわち自己鏡像認知が成立する時期である。

Gallup (1979) は、第1段階から第3段階までは、乳児が鏡の性質を理解して、鏡像を見て実物を見つけるために鏡を利用することができるようになる過程を示しているだけで、自己鏡像認知に必要な条件ではあるが、十分条件とはならないと述べている。その証拠に、自己鏡像認知のできないサルでも、自己でない物体とその鏡像との結びつきを学習することができるが、いくら鏡の自己像を見せても、自己に向けられた反応は現れず、他者に向けられた反応と同じであるという。また百合本 (1981) は、物や他人の像の認知が可能になると、自己の鏡像が他人から見られた自己の姿であることが理解されるようになるが、鏡の自己像は見え姿としては自分であるが自分そのものではない、ということが理解されるのは、まだそのあとであることを示している。

Gallup, McClure, Hill, & Bundy (1971) は、自己の概念は社会的相互作用や他者の視座から自己を確かめることによって成立するという Cooley や Mead のモデルを実証するために、隔離飼育のチンパンジーを用いて実験を行い、隔離飼育のチンパンジーでは、自己鏡像認知が成立しないことを示した。Gallup (1977) は、自己認知の成立には、社会的経験、すなわち他のチンパンジーを見たり、他のチンパンジーの視座から自分を確認する経験が必要なのではないかと述べている。

自己認知が成立するためには、自己の身体感覚や身体活動を通して外界との物理的境界を認知していくだけでは不十分であり、他者との相互作用を通して、心理的に自己と他者を分化してとらえ、自己について認識していく過程が必要であると考えられる。しかしながらこれまでの研究では、鏡像認知における、視覚的認知や視覚-運動シエマの協応の発達について、もっぱら検討されており、他者とのやりとり関係の中で、自己認知の発達をとらえた実証的研究はほとんどなされていない。

また自己認知のように、社会的、情緒的、認知的機

能と密接に関連して存在するものについては、子どもの発達を全体的にみていく中でとらえる必要があるだろう。そこで本研究では、日常生活をともにしている筆者の長男の発達を多面的にとらえる中で、乳児が他者を認知し、自己を認知していく過程を解明してみたいと考える。特に、他者との関係は、乳児のそのときの自己認知のあり方を反映しているのではないかという考えから、乳児と他者との関係を中心にみていく中で、乳児が他者を認知し、自己を認知していく過程をとらえる。具体的には、乳児にとって主要な他者である母(父)とのやりとり関係、見知らぬ人への反応、同輩に対する反応について検討した。またそれらが自己鏡像認知の発達とどのような関係にあるのかをみるために、鏡映像に対する反応についても検討した。

方 法

1986年4月1日生まれの筆者の第1子長男Rについて、出生から25か月30日(以下25:30と略記)までの期間、以下の観察を行った。Rの出生時から現在に至る家族は、父、母である。胎生期、周生期とも正常で満期(38週)出産。出生時体重2,920g、首すわり4:11、寝がえり4:8、はいはい7:2、始歩12:26、初語14:27であった。生後1:30より無認可保育所で月に数回保育を受け、13:0より23:25まで公立保育所に通った。

1. 母による日誌的観察

Rの他者(特に母)との交わりを中心に、自己認知の発達に関連すると思われるできごとを、日誌として記録した。日誌記録はさらにエピソードごとに書き出して整理された。今回分析の対象となったエピソードの数は1390である。

2. 実験室での実験的観察

生後5か月半より月1回大学のプレイルームにて行い、one-way mirrorを通してVTR録画した。実験は(1)鏡場面(20か月まで)、(2)見知らぬ人場面(16か月まで)、(3)同月齢乳児との1対1場面(17か月まで)の3種から構成され、所要時間は全体で40分前後である。実験順序はそのときの子どもの状態によって決められたが、見知らぬ人場面で泣きを誘発するようになってからは、これを最後に行うようにした。同月齢乳児のうちFは1986年3月30日生まれ、Aは1986年3月17日生まれて、ともに健康な男児である。なおAは4か月、Fは7か月、Rは13か月から同一の保育所に通った。実験は、実験者(Rの母)のほか、同月齢乳児の母、VTR担当者1名、アシスタント1名、見知らぬ人1名によっ

て行われた。各実験の手続は次の通りである。

(1) 鏡場面

鏡は幅45cm、高さ121cmで高さ39cmの脚のうえにつけられており、VTR録画しやすい位置(one-way mirrorから約2m離れたところ)におかれた。Bertenthal & Fisher (1978)、百合本(1981)を参考に、以下の課題を月齢に応じて行った。所要時間は約10分間であった。

a) 口紅課題：口紅はあらかじめウェットティッシュにつけられており、「お顔をきれいにしよう」などの話しかけとともに、実験者またはアシスタントが被験児の鼻をふく。鼻に口紅がつけられた被験児は、母親とともに鏡の前に導かれ、約1分半鏡の前での行動が観察された。

b) 指さし課題：a)のあとひき続き鏡像に注目させ、「お母さんどこ?」「～ちゃんどこ?」という問いを母親が行う。

c) スポンジ課題：直径7.5cm、厚さ3.5cmのスポンジに顔がかかれ、頭にリボンがつけられている。このスポンジの顔が長さ29cmの針金で子ども用リュックにつけられており、被験児がリュックを背負うことによってスポンジの顔が頭上にくるようになっている。リュックの装着は、実験者またはアシスタントによって気づかれないように行われ、その後鏡の前に導かれる。被験児が実物のスポンジを見つけるか、2分経過したら終了する。

d) おもちゃ課題：おもちゃは13cm×15cmのプラスチック製のくまの人形で、1.5mの細長い棒から下がる糸に結びつけられている。再び被験児を鏡に注目させ、被験児の鏡像の斜め右上に人形の像がくるように、アシスタントによってついたての背後から人形が呈示される。人形やアシスタントはついたての背後に隠れ、鏡像が映るまで被験児に気づかれないようにしてある。被験児が実物の人形を見つけるか、2分経過したら終了する。

(2) 見知らぬ人場面

見知らぬ人は30歳前後の女性(8か月時のみ男性)であり、同一人物が連続して見知らぬ人となることはなかった。Emde, Gaensbauer, & Harmon (1976)を参考に、次の連続した5つの状況での反応が観察された。所要時間は約10分間であった。

①実験室に母と被験児が残り、母が部屋を去る。②見知らぬ人が入室し、被験児を見る。③そばに近より被験児の名前を呼ぶ。④被験児を抱き上げあやす。⑤そこへ再び母が入室する。

(3) 同月齢乳児との1対1場面

部屋の中央に2人の子どもを、約60cmの間隔で向かい合わせまたはとなり合わせに置き、付近にRが日常使用しているおもちゃなど2、3のおもちゃを置く。5分間のセッションを最低2回行い、両児の行動をVTR録画した。各児の母親はそばにあり、子どもが母親を必要とするか、子どもに危害が加わるような場合を除いて、介入しないことを原則としたが、母親は両児の交渉場面がみられるように配慮することが多かった。平均観察時間は約15分間であった。

(1)～(3)の各実験については、VTR観察により生じた行動を記述し、どのような行動が現れたかという質的分析を行った。

3. ウズギリスーハント尺度による発達評価

精神発達の状態をより客観的に知るために、Uzgiris & Hunt (1975)を参考に、母が検査者となり、家庭で実施した。テストは4か月半より毎月2回、16、17か月は毎月1回、17か月まで行われた。

結果と考察**

日誌的観察から母(父)とのやりとり関係、実験的観察から見知らぬ人に対する反応、同輩に対する反応、鏡映像に対する反応について、それぞれ結果の主要なものをTABLE 1～4に整理して示した。***

0～7か月

Rは2か月頃生まれて初めて鏡の自己像を見たとき目を丸くして凝視した[4-1]が、これは、すでに見知っている父母以外の顔を見て注目したのではないかと思われる。この頃には、だれかが近づくと泣きやむ[1-2]など、欲求を満たしてくれる者として他者を認知している。3、4か月頃から母と見知らぬ人の顔を見比べていたが、5か月半ば頃からときどき見知らぬ人に抱かれて泣くようになり[2-3]、他者が自分との関係によって分化し始めた。また6か月0日には母との間に共鳴動作がみられなくなり[1-4]、同時に母と自分との間も分化してきた。このように他者や自他が分化してくる前に、4か月半ば過ぎ頃、抱かれているとき親がテレビを見ていたり、親同士で話したりしていると、親の顔をじっと見、親が子どもの方を見るとさっと視線をそらすようになった[1-5]。

同輩に対しては人見知りのような現象はみられず、5か月頃すでに他児の存在への関心がみとめられた

** 本文中の[]内の数字は、TABLEの番号及びTABLE中のエピソードの番号を示す。

*** ウズギリスーハント尺度による発達評価の結果は省略した。

TABLE 1 母(父)とのやりとり関係の発達的变化

月齢	母(父)とのやりとり関係など
1	注視・微笑・発声の開始
2	母が近づくと泣きやんだり手をバタバタさせて喜ぶ[2]
4	自分から母に微笑 父母への注視と視線の回避(授乳中母がよそをむいているときや両親の会話中じっと見ているが、親が子どもを見ると視線をそらす)[5]
5	共鳴動作(手の開閉・腕を伸ばす)
6	共鳴動作の消失[4]
8	模倣の出現(ブロックの打ち合せなど)[11] 物を介した三項関係(ブロックを倒す遊びで祖母の反応を見ながら喜ぶ)[13] 伝達の意図をもった行動(つかまり立ちし母をふり返る・母の腕にふれおもちゃを取らせる)[14]
9	自分の存在の主張(母と客や両親の会話中ガーガー言う)母に物を差し出す
10	指さし・「ちょうだい」の身振りの理解[15] だだこね(抱いて欲しいとき足に力をいれず立たない)[16] かんしゃく(さわりたい物を取り上げられるとテーブルにかみついてガーガー言う)[17] いやな食べ物の拒絶(欲しい物のみ食べる) 手さしで要求
12	やりとりゲームを自分から始める[23]
13	日常生活の模倣(電話・歯みがき・帽子をかぶる)[26]
14	自分にできないことを母に頼んでもらう(ミカンの皮をむいてもらう)[27] かけひき(白い器のかわりにジュースの缶を渡す・さわらせてもらえるまで食べない)[24]
15	自分がされていることを母に対してする(ご飯を食べさせる・歯ブラシを口にいれる)[28] 禁じられていることをするとき母の反応を待つ[29]
16	いやいやゲーム(おせんべいを差し出して母が取ろうとすると首をふりながら引っ込める)と首の横ふりの定着[30] 母や周囲の人にさかんに物を手渡す 自分の持ち物の理解[31] 指さしで要求 じだんだを踏む いらないものは母に返す
17	ダメと言われるたびに自分の首をふり、それをしない[32] 自分が帰りたいとなるとバイバイと言う[33] 「つもり」の出現(乗り物をしまうとき思う通りの形に並べたい・朝父と一緒に行けないと、足をバタバタさせて泣きわめく)[34]
18	自他の鼻・目の部位の理解 父母の写真や衣服・持ち物に名前を言う[35] 自分の写真や鏡像に名前を言う[36]
21	人形を並べてすわらせ、自分も同じように並んですわる[38] カメラのレンズを自分の額につけてシャッターを押す[39]
22	「ボク、ボク」とうるさく言って自分がしたがる[40]
25	お人形さんごっこ・一人二役の会話[42] 「～したい」「～ね、～ね」「～しようか」などの言葉[43]

TABLE 2 実験場面における見知らぬ人に対する反応の発達的变化

月齢	母(M)退室	見知らぬ人(S)の接近・声かけ・抱き上げ	母(M)再入室	母(M)による抱き上げ
5～6	目で追うが表情は変化なし	注視	MとSの顔の見比べ後少し泣きそうになる[3]	変化なし
*8～10	目で追いドアの注視・不安そう	注視ののちそっくり返って激しく泣く	泣いていて気づかない	泣きやみSを注視
11～12	泣きながらはって後追い	顔をそらして泣く	うれしそうに発声・微笑	Sに向かって笑うが、抱かれそうになるとMにしがみつく[19]
13～15	しがみついて離れない・激しく泣く	Sに手をのばすが、抱かれるとMの出て行った方に両手をのばし、のがれようとする	泣きやみMにしがみつく	Mにしがみついたまま

*7か月は実験中眠くて反応が不明確

TABLE 3 実験場面における同輩に対する反応の発達的变化

月齢	同輩に対する反応
5:16	手をのばしながら顔と顔をつき合わせてお互い発声[6]
6:7	耳をひっぱられ、頬をつかまれて泣き出す[7]
6:29	一斉に同じ方向を見たり、相手の見た方を見る・相手のしていることを見て同じことをする(ゴザをひっかく)[10]・つかまれると声を出してふり払おうとし、つかみ返す[8]・おもちゃを取られるが無表情[9]
8:6	アーと言いながらボールをFに差し出す
9:11	泣いているFを見る・機嫌よく一人で遊ぶ・母を相手に遊ぶ
10:5	おもちゃを取られる・Fの耳をひっぱる・Fは母に促されRにブロックを差し出すが手を放さずひっぱり合いになる[18]
11:13	Aのしていることを見ながら発声・Aのしていることに手を出そうとする(積んだブロックを倒すなど)
12:5	青い輪が気に入る、他の色ではダメで激しい取り合いや怒りの泣き[22]
13:5	AがRの持っているぬいぐるみを取ろうとすると拒否するが、Aが固執せず後ろを向いて絵本を見始めるとAの方にぬいぐるみを差し出し、Aの反応がないとAの母に差し出す[25]・AからRへ輪の受渡し
14:10	青い輪の取り合いで声をあげひっぱり取るが、Fに目をつかまれて激しく泣くと、その後輪投げで遊ぶのをいやがる
16:4	相手が持っているおもちゃを欲しがり取ろうとするが、相手が取られまいとするのであきらめて他のおもちゃで遊ぶ
17:1	Aの母のまねをしてAの頭に輪をのせようとする

TABLE 4 鏡映像に対する反応の発達的变化

月 齢	鏡映像に対する反応
2～8か月 鏡像に対する興味	驚嘆・凝視・泣き (2:11) [1] 凝視の後発声・微笑 (2:12) うれしそうに笑う (4:4) さわってたく (5:1) 足でけり、足の辺を見る (5:29) [12] 口をつけてなめる (6:20) 鏡の自分の顔をかきむしる (7:27) 母の鏡像と実物を見比べて不思議そう (8:14)
9～11か月 自己像に対するとまどい 鏡像と自分の体の関係を調べる	鏡の自分の顔をとまどったようにじっと見る (9:8) [20] 鏡像を見て頭上のスポンジの顔をつかむ (10:5) [21] のぞきこむように自分の顔を見、何度か顔を付けてみる・手でひっかこうとして鏡像と自分の手に注目 (10:19) 鏡を見ながら帽子を下げたり上げたりする (11:28)
12～16か月 像でなく鏡に対する行動 像と実物との関係を媒介するものとして鏡の性質を知ろうとする	注視・発声・うれしそうに鏡をたたく・手を上下にふる・手をくんでくはなす・鏡を持ってゆらす (12:5) 母の鏡像にさかんに笑いかけ、鏡の裏をさがしていないのに気づくと、変だなという様子をし後ろをふり返る (13:19) おもちゃの鏡像を注視し、アーアー言いながら手をのばし欲しがり、ときどき鏡の向こう側をのぞいてみる (14:10) 鏡の自分の顔に注目して、鏡の横をさがし、鏡像に口をつけ、鏡の裏を歩き回る (15:8) テレビの画面に自分の顔が映っていると、顔を近づけたり遠ざけたりする (15:16)
17～23か月 自己像と自分の名前との結合 自己像が自分の見え姿であることの理解 他のものなら像の虚像性を理解	「Rどれ」と聞くと鏡像を指さす・「お母さんは」と聞くと母の鏡像を指さす (17:12) 鏡像に向かって「アイ」とティッシュの箱を差し出す (18:13) 鏡像を指さすので「だれ」と聞くと「デョーチャン」と言う (19:1) 鏡像を見て実物のおもちゃをふり返る (19:5) [37] 鼻にクリームをぬって鏡を見せると、鏡像の鼻のクリームを少しさわって、鏡に鼻をつける (19:28) クシで髪をとかしながら鏡を見る (20:1) 白いぬり薬をベタベタにぬっている自分の顔を鏡で見ても変化なし (20:11) 「Rどれ」と聞くと、これまでにないはっきりと鏡像を指さす (22:27)
24か月 自己鏡像認知の成立	ガーゼをはられた自分の顔を鏡で見、自分の顔のあたりをさわって「ここ痛いノボク痛い」 (24:14) [41]

() 内は (月:日) 齢を示す

[3-6]。6か月にはつかまれるなど、他児からの働きかけを受けるようになり[3-7]、7か月頃つかまされると声を出してふりはらおうとし、つかみ返す[3-8]など、いやがる意思表示をするようになった。しかしこのときはおもちゃを取られても無表情であり[3-9]、まだおもちゃに対する所有意識は現れていないようである。また相手の注意の方向やしていることに興味を示すな

ど、相互作用らしきものが観察され、相手のしていることを見、同じことをする模倣もみられた[3-10]。母との間に模倣がみられたのは8か月になってから[1-11]なので、模倣は親より同輩に対しての方が起こりやすいということが考えられる。また8か月頃までは、鏡の自己像に対しても同輩に対するのと同じような興味を示している[4-12]。

8～11か月

人見知りが最も顕著な8か月頃には、三項関係が成立し[1-13]、模倣や伝達の意図をもった行動がみられる[1-14]など、物やテーマを媒介とした父母とのやりとりが可能になった。ある目的をもって相手に働きかけたり、自分の行動に対する相手の反応を予測しているなど、意図性の出現がみとめられる。さらに10か月には、父母の指さしや「ちょうだい」の身振りに反応するようになった[1-15]。同じ頃だこねやかんしゃくの初歩的なものがみられるようになり[1-16, 17]、同輩に対しても、Fの耳をひっぱることや、Fが差し出したブロックを取ろうとするがFが手放さないのでひっぱり合いになることが観察された[3-18]。しかしこの時点では、おもちゃを取られても取り返そうとするのではなく、母に甘えることが多かった。

11か月頃からは分離不安が激しくなり、見知らぬ人に抱かれまいとして母にしがみつくなど[2-19]、安全基地としての母の機能が明確になってきた。ふだん母がそばにいれば人見知りもやわらいできた。しかしながら14か月には、マスクをしたり、髪を切ったりした母に対する違和感を示しており、母親の認知もまだ視覚的なものに大きく左右されるようである。またRは9か月頃物の永続性が成立し(ウズグリスーハント尺度)、鏡の自己像をとまどったようにじっと見るようになった[4-20]。この頃鏡像は他者の一人であるが、自分と関係あるらしいことに気づき始めるのではないだろうか。10か月には、自分の体についたスポンジの顔を、鏡像を見てふり返ることができるようになり「4-21」、自分の体の動きと鏡像の連動性についての理解がみられる。他者と同じように、自分も空間上に位置を占めて存在していることを理解し始めているらしい。

12～17か月

12か月には、他の物ではダメでどうしてもそれではなければならないという物が出現し、同輩との間で激しい取り合いが観察された[3-22]。母に対しては、12か月半ば頃から「エエ！」と言って自分から物を差し出し、受け取ると手を出して要求し、やりとりを何度もくり返すやりとりゲームを1日に何回も行うように

なった[1-23]。その後自分の欲しい物は母に渡さず別の物を渡したり、自分のさわりたい物をさわらせてもらえるまでご飯を食べなかったりするなど[1-24]、自分の目的を遂行するために自分の行動を調整するようになった。同輩に対しても、相手が欲しがると拒否したぬいぐるみを、相手が欲しがらなくなると差し出し[3-25]、相手の反応によって自分の行動を変えることがみとめられた。

14~16か月にかけて模倣[1-26]ややりとりゲームが頻繁に観察されており、これらのことを通じて、他者の身体に対応する自分の身体の部位や、他者に対置されるものとしての自分など、自分と他者の関係について学習していくことが推察される。この頃には、自分にできないことを母に頼んでしてもらったり[1-27]、自分がふだんされていることを母に対してしたり[1-28]、禁じられていることをするとき母の反応を待ちたり[1-29]することがみられた。

16か月には、首の横ふりを拒否の意味で使うようになった[1-30]。また保育所に母が迎えに行くと、カバンがぶら下げてあるところに行くと、自分のカバンの下に立ち、カバンを指さして取ってくれと保母を促すなど、自分のカバン、帰るときの手続などを理解している様子が観察された[1-31]。17か月頃には、母の顔をじっと見ながらおむつバケツに手を突っ込もうとしていたが、「ダメ」と言われるたびに自分の首を左右にふり、それをしないことがあり[1-32]、首の横ふりが自分に対する禁止の意味にも使われた。また、近所の子どもたちが帰るとき「バイバイ」と手をふってくれども、手をふらなかったが、自分が帰りたくなると、遠くの子どもたちに向かって「バイバイ」と手をふり、家の前の階段のところでもう1度手をふることが観察された[1-33]。いずれも他者の動作の模倣だが、他者の態度を自分に取り入れ、自分の行動をコントロールしたり、自分の意思にそった場面で使うようになった。さらに、乗り物をしようとき自分が思う通りの形に並ぶまで何度も並べ直したり、朝父と一緒に行けないと、足をバタバタさせて泣きわめくなど[1-34]、自分の「つもり」のようなものも出現してきた。この頃、認識や行動の主体としての「自己」が意識されるようになるのではないかと考えられる。

18~25か月

18か月頃には、父のことを「タッチャン」母のことを「チャーチャン」自分のことを「デョーチャン」と明らかに言うようになり、父母の写真や衣服、持ち物に命名[1-35]するようになった。自分の写真や鏡像と

自分の名前も結びついてきた[1-36]。19か月には鏡像を見て実物のおもちゃをふり返るようになり[4-37]、他のものなら像の虚像性が理解できてくる。この頃から二語文を含めて急に語彙が増え始め、父母とのやりとりも言葉を混じえたものになってきた。また18か月になると、マスクをしている母を見ても違和感を示さなくなり、見かけにかかわらず母は母であることが認識されているらしい。一方で16か月頃から、見知らぬ人に対してひたすらじーっと見つめたり、母の足にしがみついたりするようになり、再び人見知りを強く示し始めた。

21か月のときには、人形を並べてすわらせ、自分も同じように並んですわってみたりし[1-38]、見る自分だけでなく、見られる自分の役も演じているようにみえた。しかしこの頃、カメラをさわりたいがるので貸してやると、自分から見える通り、すなわちレンズを自分の額につけてシャッターを押すまねをする[1-39]ことが観察された。自分を他者の立場に置き換えてみることはまだできないようであった。

22か月には、明らかなみたと遊びが観察され、カメラも正しい向きで扱うようになった。また、「ボク、ボク」と言って、母がしていることを自分がしたがるようになった[1-40]。24か月には、けがをしてガーゼをはられた自分の顔を鏡で見ると、それまで1度もさわらなかったのに、自分の顔のガーゼのあたりをさわって、「ここ痛い！ボク痛い」と言い、自己鏡像認知が成立していることが観察された[4-41]。同じ頃、ぬいぐるみの顔の前に本を開き、本を見せたり、絵本を積木で叩いて「くるみちゃん（絵本の主人公）、痛い！痛い！」と言うなど、他者の立場を理解している様子がみられた。自分が経験したことや父母とのやりとりを人形相手に再現し、人形にふるまわせたり、言葉を言わせたり、自分と人形との間で、一人二役的な会話をしたりしていた[1-42]。また、これまで要求する時「～して」と言っていたのが、「～したい」と言うようになり、「～ね、～ね」「～しようか」など同意を求めるような言葉を頻繁に発するようになった[1-43]。自己の要求や視点にだけしばられていたのが、他者の要求や立場も考えられるようになりつつあると言える。

討 論

本研究の目的は、他者との関係をみていく中で、乳児が他者を認知し、自己を認知していく過程をとらえることにあった。Rの場合自己鏡像認知の成立までに、TABLE 5のような段階が観察された。

TABLE 5 0～2歳における自己認知の発達(Rの場合)

0か月～	自己鏡像に驚嘆・凝視・泣き(2) 母と見知らぬ人の顔の見比べ(3)
4か月～ 自他の分化の始まり	父母への注視と視線の回避(4) 人見知りの気配(5) 共鳴動作の消失(6) 同輩との間で相互作用(7) 明らかな人見知り(8) 模倣・三項関係・意図的コミュニケーションの出現(8)
9か月～ 自分の存在についての認識の始まり	物の永続性の成立(9) 自己鏡像にとまどい(9) だだこね・かんしゃく(10) 自分の体の動きと鏡像との運動性の理解(10)
12か月～ 他者とのやりとりの中での自他の関係についての認識	同輩と激しいおもちゃの取り合い(12) やりとりゲームを自分から始める(12) 他者の反応を予測し自分の行動を調整(13) 模倣・やりとりゲームがさかん(14～16) おもちゃの取り合いが頻繁(15～17) 拒否の明確化(16) 自分の所有物の理解(16)
17か月～ 主体としての自己認識の始まり	他者の態度の自分への取り入れ(17) 「つもり」の出現(17) 父母自分の名前の明確化(18) 父母の所有物や友だちの名前の理解(18) 自分の写真や鏡像に名前を言う(18) 鏡像を見て実物のおもちゃをふり返る(19) 「ボク、ボク」と言って自分がしたが(22)
24か月～ 他者の視点や立場の理解	自己鏡像認知の成立(24) お人形さんごっこ・一人二役的会話(25) 「～したい」「～ね、～ね」「～しようか」などの言葉(25)

()内は月齢を示す

乳児は生後2か月頃にはすでに欲求を満たしてくれるものとして他者の存在を認知しているが、他者が自分と相対するものとして存在し始めるのは、4か月半ば過ぎと考えられる。Werner & Kaplan (1963) は、つかむことと見るものが協応動作として成立してくることを静観的態度の出現とし、事物と身体が融合した状態から、そこにあるなんらかの事物をつかんで注視するようになることは、対象に対して相対的自立を保ったままで見るという態度が働き始めたことを示しているという。Rが親を注視し、親の視線を回避するようになったのも、目と手の協応が成立(4:17)した後であった。Werner & Kaplan (1963) は事物について述べているが、Rにとって他者が、これまでの欲求を満たしてくれる者としてだけではなく、自分とはかわりがないところでも存在する者として認知され始めたのではないかと推察される。麻生(1981)は、4か月

の一乳児が、おとながじっと見つめると必ず視線を回避するようになることから、この時期を、Wallon(1949)のいう「対峙の感覚」が出現する時期と位置づけている。この頃他者の存在を意識し始め、他者の視線を感じる「自分」というものが形作られてくるのではないだろうか。

人見知りを示し始める5、6か月頃には、父母と見知らぬ人、大人と同輩を弁別しており、他者と自分との関係について何らかの認識をもっているらしい。人見知りが最も顕著な8か月頃には、自他の分化もより明確になり、自分から他者へ意図性をもった働きかけが出現する。9、10か月頃には他者の意図の理解がみられ、自分の存在に気づき始める。その後自分の要求、所有物を主張するようになり、また、他者とのやりとりを通して、自分の身の回りの物、日常生活の意味を理解するようになってくる。乳児は其中で、他者の意図とのぶつかり合いや、他者からされたことを自分がしてみたりすることによって、認識や行動の主体としての「自己」を意識するようになるのであろう。その際大人とのやりとりは乳児の意図を補う形で行われるのに対し、同輩の間では、大人たちが相手の場合とは異なる経験を得ると思われる。自分の体をつかまれたり、おもちゃを取られたりということは、大人との間にはめったに起こらないできごとである。痛い思いをすることや自分が遊んでいるおもちゃを取られてしまう経験から、自分の身体が存在や「～したい」という欲求の主体としての自分、また他児と自分との優劣関係などを認識していくのであろう。

しかしながらこの時期には、鏡に映ったおもちゃや他者については、自分の鏡像を手がかりに実物のありかを見つけることができるのに、鏡像を見ても、自分の顔についた白い点々を直接さわろうとしない。自己鏡像認知が成立するには、鏡像は見られている自分であるというものの理解が必要であるが、外的空間に属しており、常に見られる側にあるおもちゃや他者とは異なり、自分は常に見る側にあるため、対象化が困難であるからと考えられる。自分の写真や鏡像に自分の名前を言うことができるようになるのは、自分の見え姿を、他者同様、外的空間に認知しているにすぎない。自己鏡像認知が成立するためには、認識や行動の主体としての「自己」が育つ一方で、他者の視点や立場を理解するようになることが必要であると思われる。

Rの場合他者の視点や立場の理解がみられ始めたのは、自己鏡像認知が成立した2歳頃である。麻生(1984)は、一乳児が2歳前後に、他者からの見えを理解し、

役割交替・一人二役的行動を示すようになり、象徴的な水準で自己と他者とを対等なものとなしうることができるようになったことを報告し、これを自己—他者の基本構造の成立としている。なお麻生(1984)の乳児では、すでに1歳半頃自己鏡像認知がみとめられており、浜田(1984)は自己鏡像認知を、2歳前後に象徴レベルの自他関係に移行していく過程で現れる、自分の所有物に自己の投影がつかまとうような投影的なレベルの自他関係として位置づけている。しかしながら本研究では、自己鏡像認知は、浜田(1984)のいう象徴レベルの自他関係に移行する頃出現した。これまでなされている研究でも、自己鏡像認知の成立の時期にはかなりの幅があり(1歳半~2歳以降)、実験条件や成立の指標の違いによるところが大きいと思われる。

いずれにせよ自己認知の発達には、他者とのやりとりを通して、その対の一方である自分について、主体としての意識が芽生えるだけでなく、他者の視点や立場を理解し、他者から自分がどう見えているかについて認識していくことが必要であると言える。乳児は他者に働きかけることによって他者の存在を知り、その他者から働きかけられることによって自分の存在に気づいていく。他者との間で意図性をもったやりとりが可能になると、認識や行動の主体としての「自己」を意識するようになっていけるとともに、やがて他者の立場や視点を理解していくようになって考えられる。なお本研究で得られた結果については、さらに数多くの事例によって実証される必要があろう。

引用文献

- Amsterdam, B. 1972 Mirror self-image reactions before age two. *Developmental Psychology*, 5, 297—305.
- 麻生 武 1981 乳児Nの“人”としての成長 一生後0カ月から6カ月まで— 大阪市立大学大学院文学研究科 人文論叢, 10, 17—38.
- 麻生 武 1984 他者の空間的視座理解と自我形成—2歳誕生日前後における“自己—他者”の基本構造の成立— 日本教育心理学会第26回総会発表論文集, 190—191.
- Bertenthal, B. I., & Fisher, K. W. 1978 Development of self-recognition in the infant. *Developmental Psychology*, 14, 44—50.
- Emde, R. N., Gaensbauer, T., & Harmon, R. 1976 Emotional expression in infancy : A biobehavioral study. International University Press.
- (阿部秀雄 監訳 安藤則夫 訳 1985 乳児期における情緒の表われ：生物行動学的研究の試み 風媒社)
- Gallup, G. G. 1970 Chimpanzees : Self-recognition. *Science*, 167 86—87.
- Gallup, G. G. 1977 Self-recognition in primates : A comparative approach to the bidirectional properties of consciousness. *American Psychologist*, 32, 329—338.
- Gallup, G. G. 1979 Self-recognition in chimpanzees and man : A developmental and comparative perspective. In M. Lears, & L. A. Rosenblum (Eds.), *Genesis of behavior*. (Vol. 2) The child and its family. New York : Plenum. Pp. 107—126.
- Gallup, G. G., McClure, M. K., Hill, S. D., & Bundy, R. A. 1971 Capacity for self-recognition in differentially reared chimpanzees. *The Psychological Record*, 21, 69—74.
- 浜田寿美男 1984 自我形成論③ “自己と他者”の基本構造の成立, 討論 発達, 20, 109—113.
- Lewis, M., & Brooks-Gunn, J. 1979 Social cognition and the acquisition of self. New York : Plenum.
- Mead, G. H. 1934 *Mind, self, and society*. Chicago : University of Chicago Press. (稲葉三千男・滝沢正樹・中野収 訳 1973 精神・自我・社会 青木書店)
- Uzgiris, I. C., & Hunt, J. McV. 1975 Assessment in infancy : Ordinal scales of psychological development. Illinois : University of Illinois Press. (白瀧禎昭・黒田健次 訳 1983 乳幼児の精神発達と評価 日本文化科学社)
- 百合本仁子 1981 1歳児における鏡像の自己認知の発達 教育心理学研究, 29, 261—266.
- Wallon, H. 1946 Le rôle de l'autre dans la conscience du moi. *J. Egypt. Psychol.* (浜田寿美男 訳編 1983 身体・自我・社会 ミネルヴァ書房 Pp. 52—72.)
- Wallon, H. 1949 Les origines du caractère chez l'enfant —Les préludes du sentiment de personnalité—. Presse Universitaire de France. (久保田正人 訳 1965 児童における性格の起源—人格意識が成立するまで— 明治図書)
- Wallon, H. 1956 Niveaux et fluctuations du moi.

L'Evolution Psychiatrique. I. (浜田寿美男 訳編
1983 身体・自我・社会 ミネルヴァ書房 Pp. 23
—51.)

Werner, H., & Kaplan, B. 1963 Symbol formation
: An organismic-developmental approach to
language and the expression of thought. John
Willy & Sons Inc. (柿崎祐一 監訳 鯨岡 峻・
浜田寿美男 訳 1974 シンボルの形成：言葉と
表現への有機発達論的アプローチ ミネルヴァ書
房)

謝 辞

本論文は、鳴門教育大学大学院昭和62年度修士論文
の一部を加筆修正してまとめたものです。本研究をご
指導いただいた鳴門教育大学 佐々木宏子教授，ご助
言をいただいたお茶の水女子大学 浅見千鶴子名誉教
授，鳴門教育大学 佐々木保行教授，浅野弘嗣教授に
深く感謝いたします。

(1989年9月18日受稿)